

P09

当歯科で行っている小児への対応法に対するアンケート調査

○米澤彩美、東 優里、児玉美由紀、重田浩樹
(しげたこども歯科)

【目的】

歯科医院は小児にとって見知らぬ物や人が多いため、それらに対して回避行動や逃避行動をとる。そのため、我々は小児の診療室内での適応性を高めるような対応をする必要がある。当歯科では「また行きたくなるような楽しい歯科医院の構築」を理念の一つに掲げ、様々な対応法を行っている。そこで今回は、当歯科で行っている対応法に対して保護者へのアンケート調査を行ったので報告する。

【対象と方法】

初診の対応が終了し、定期的に通院している患者の保護者 493 名を対象とし、院内環境や治療、定期健診の各項目について、大変良いを 5、良いを 4、普通を 3、やや悪いを 2、大変悪いを 1 として、無記名方式のアンケートを行い集計した。また、治療を行った児のトレーニング回数も調査した。

【結果】

院内の環境についての平均が 4.5、治療についての平均が 4.6、定期健診についての平均が 4.5 であった。トレーニング回数の平均は 3 歳で 2.6 回、4 歳で 2.0 回、5 歳で 1.8 回、6 歳で 1.2 回で増齢に従い、減少していた。

【考察】

当歯科では理念実現のために院内の飾り付けや待合室に工夫を凝らしたり、当歯科で作製した媒体を使っての行動変容法や保健指導、悪習癖に対する支援を行っている。これらに対して保護者の評価はおおむね良好であり、トレーニング回数も奥ら¹⁾の報告と同様であった。今後は、今回得られた結果や意見をもとに「また行きたくなる楽しい」歯科医院作りをしていきたい。

【文献】

1) 奥 猛志 他：歯科治療時における小児の協力度ならびにトレーニング回数に関する研究、小児歯誌、46：463-468、2008。

P10

幼稚園児・保育園児の 舌小帯短縮症の実態調査

○奥猛志、切手英理子、大内山晶子、弘野美紀、
坂口知穂、久保麻美子
(医療法人 おく小児矯正歯科)

【目的】舌小帯短縮症は、舌が口底部に癒着している舌小帯異常であり、舌の運動が制限されることにより、構音障害や哺乳障害、不正咬合を引き起こすことがあるといわれている。

今回、歯科健康診断時に幼稚園児・保育園児の舌小帯短縮症の診査を行ったので、その頻度ならびに咬合との関係について報告する。また、園児の食生活についてアンケートを行い、舌小帯短縮症との関係についても検討した。

【対象と方法】対象は幼稚園児・保育園児212名(0歳～5歳、平均年齢3歳)である。園児に対して口腔内診査を行い、舌小帯短縮の有無ならびに咬合の診査を行った。舌小帯短縮の判定基準は熊谷の方法により判断した。保護者に対しては、食生活等についてのアンケート調査を行い、舌小帯短縮との関係についても検討した。

【結果】舌小帯短縮症は17名(8.0%)に認められ、2才以下8名(15.4%)、3才以上9名(4.6%)であった。咬合状態は、園児全体では正常咬合60.0%、過蓋咬合23.6%、上顎前突14.9%、叢生8.2%、反対咬合2.6%、開咬2.1%、交叉咬合2.1%の順であった。舌小帯短縮がある者はない者と比較すると、上顎前突、正常咬合が少なく、過蓋咬合が多い傾向が認められた。授乳方法ならびに飲み方、現在の食べ方について、両者に大きな差は認められなかった。また、ことばについてのアンケートでは、聞き取りにくいと答えたのは全体の11.0%であり、両者に大きな差は認められなかった。

【考察】今回の調査の結果、舌小帯短縮症は園児の8.0%に認められ、低年齢児ほど頻度が高かった。また、舌小帯短縮症では過蓋咬合の頻度が高く、舌の可動性障害が咬合に関与している可能性も考えられた。一方、アンケート結果からは、舌小帯短縮による哺乳や食生活、発音への影響は認められなかった。